

## 統計学者小島勝治の残された課題

高 橋 伸 一

### 〔抄 録〕

本稿でとりあげる小島勝治は1914年に大阪市で生まれ、1944年には外地で戦病死する。その短い生涯において、民俗学、統計学、社会事業論の分野で優れた業績を顕した小島の仕事ぶりは、圧巻という以外にない。

小島の研究は、彼の友人たちによって『日本統計文化史序説』（未来社、1972年）、『統計文化論集』Ⅰ～Ⅳ（未来社、1981～1985年）の5冊にまとめられ刊行されている。民俗学・郷土史、統計学、社会事業論の幅広い領域をカバーする小島の研究情熱はある意味で異常である。その異常の背景にあるものを小島が残した手記や日記、手紙等の生活史資料から浮かび上がらせたい。

キーワード 小島勝治、統計文化、民俗学

本稿の課題は、幻の統計学者と言われる小島勝治の圧倒されるような業績を概観しようとするものではない、彼の人となりを描き出そうとするものである。その主たる目的は、短い生涯において、民俗学、統計学、社会事業論という幅広い分野で優れた業績を可能にした人間への強烈な関心である。加えて、小島と佛教大学との繋がりである。すでに40年以上の前、故上田千秋先生が佛教大学社会福祉学研究室の名で「資料 小島勝治文献目録」を執筆、その経緯を次のように記されている<sup>(1)</sup>。

「この目録の原稿は、10行、25字詰の原稿用紙の一マスに二字づつ楷書で綴った108枚に及ぶものである。私たちはこの原稿を、彼が遺した『本棚ひとつ分』ほどのメモや日記や論文の抜きずりの束の中から発見したのであるが、この膨大な『小島文献』は、終戦直後、その散逸をおそれて、整理され京大経済学部図書館に収納されたものと重複している資料及び日記の類であって、つまり全体の『小島文献』の一部であって、京大の大橋隆憲教授、阪大の丸山博教授、金沢経済大の鈴木宗憲教授、華頂短大の吹田盛徳教授、その他の先生方の御厚意によって私どもの研究室に、現在保管されているものである。」

「本棚ひとつ分」ほどのメモや日記の類から、「文献目録」を発見されたことの意義は大き

い。現在、このメモや日記の多くは散逸し、一部が著者の手元に保管されている。未だ発表されていい小島のメモや日記を材料に、人間小島勝治の姿に迫りたい。

## 1. 小島勝治の仕事

小島勝治は 1914 年に大阪市で生まれ、1944 年には外地（中国）で戦病死する。その短い生涯において、民俗学、統計学、社会事業論の分野で優れた業績を顕した小島の仕事ぶりは、圧巻という以外にない。

小島の業績は、遺稿集として、『日本統計文化史序説』（未来社、1972 年）没後 30 年近くになって出版された。この書の序によれば、「小島が 23 歳から 28 歳までの 6 年間、昭和 12（1937）年から昭和 17（1942）年までの間に、独立独歩独学独創による大阪の町人学徒の心意気で、貧乏書生の財布をはたいて蒐集した典籍から産みだした、小島の 20 歳台の業績である。」（丸山博）さらに、序説から 9 年後、『統計文化論集』I～IV（未来社、1981～1985 年）が刊行され、小島の統計・統計学・統計史に関する仕事の全貌が、この全 4 分冊で展開されている。

先に触れた「小島文献目録」によれば、「彼の著作数は、昭和 6（1931）年 4 月から昭和 15（1940）年 7 月までの 112 ヶ月で合計 386 種、月平均は 3.5 となる。しかし、彼が本格的に書きだしたのは、昭和 10（1935）年以後のことだから、一ヶ月の平均は 5.3 となる<sup>(2)</sup>。

小島は日本統計学会に所属していたとはいえ、まったくの民間研究者である。当時、大阪府下布施市役所の産業課統計係、のちに大阪市役所の社会事業団体「弘済会」の庶務課統計係であった。いわゆる大学の研究室に身をおき統計学者とよばれるような境遇ではなかった。彼の研究業績は、地方統計協会雑誌『浪華の鏡』（大阪府統計協会発行、昭和 11 年創刊、同 18 年廃刊）と小島編の『社会事業論叢』（財団法人弘済会発行、隔月刊行で昭和 15 年 2 月創刊、同年 9 月まで刊行）にて発表されるが、民俗学などの仕事は、『土と史』（昭和 10（1935）年 2 月 創刊号）など、小島編集の謄写版印刷の冊子によるほかなかった。小島の深い友人で、協同研究者でもあった松野竹雄の積年の努力で小島の統計学の業績は刊行されたが、民俗学、社会事業関連の仕事の多くは残念ながら未整理に終わっている<sup>(3)</sup>。

## 2. ペンネームについて

小島の才能は多岐にわたっている。研究領域の幅もひろいが、それ以外の領域でも仕事を残している。書道、篆刻、随筆、小説などである。幅ひろい仕事の仕方と関係するのか、雅号やペンネームが多い。「小島文献目録」にペンネームを整理している。

「こうして並べてみると 36 のペンネームがあるが、大部分は「土と史」、「昔」をほとんど単独執筆していたころのもので、その後は釋迢風を随筆に、立藤武助を統計実務論につかった」とある、また中学時代には「風羅久」、書道、篆刻の雅号には「楠華」「楠南」「柴山」などを使ったとある<sup>(4)</sup>。

多くのペンネームを必要とした理由を推測すると、小島が編集する同人の雑誌、例えば、昭和 10 (1935) 年の「土と史」(第一号)では、創刊の辞以下 6 本の稿が掲載さて、それらはすべて小島の執筆であるので、雑誌の体裁上からそれぞれに異なった名前を用いる必要があったということは、容易に推測できる<sup>(5)</sup>。



昭和 10 (1935) 年 2 月 1 日 発行「土と史」第一号

ただ、小島の場合は、それだけにとどまらないのではないか。小島 18 歳の時、河内二郎の名前で、「手記 天涯放浪の青年若士」前編、中編を書いている。彼の自分史ともいえるこの作品においても、登場する家族の名前は、実名とは異なっている。自分の備忘的な記録、手記であれば公刊すること、発表することを予想してはいないだろう、さすれば、家族や親族の名を実名としなかったのはなぜであろう。

小島の遺稿集を編集した丸山博は、小島の残した日記に注目している。「小島が『他人のためにかいたもの』、すなわち『小島の著作』を編するものの一人として私が、小島が『じぶんのためにかいたもの』つまり「小島のみずからしるした日記」を「編者のまえがき」としてここに発表することの意義はなしとはしないであろう。それは読者が著者をよりふかく理解できるようにと考える編者の読者への任務であり、また小島への編者の懐旧の思いでもあるからである<sup>(6)</sup>。

「日記を整理してみたら大正 15 年のものから毎年のがきちんと出てきた。妙になつかしくてしかたがない。むやみと書きためた雑文のつづりよりも、こうしたものが結局のちままでのこしておきたくおもう。そうすると久しぶりで当用日記を買って早くつけたくしょうがない。子供のようなたのしみであるが、まだ年があけないのに記しは始めている。」

さらに、続けて・・・

「数年来私の書いた雑文は相当の量になる。それも過去の日記とてらしあわせて、わたしにはなつかしいので、やはり雑文のみから、一生のなつかしみは出てこないようである。そこに人の為にかいた文と、わがためにかいた文との本質上のちがいがあると思われる。だから、日記はわがために、むしろひみつのことごとをしるしておくのがほんとうだろう。」<sup>(7)</sup>

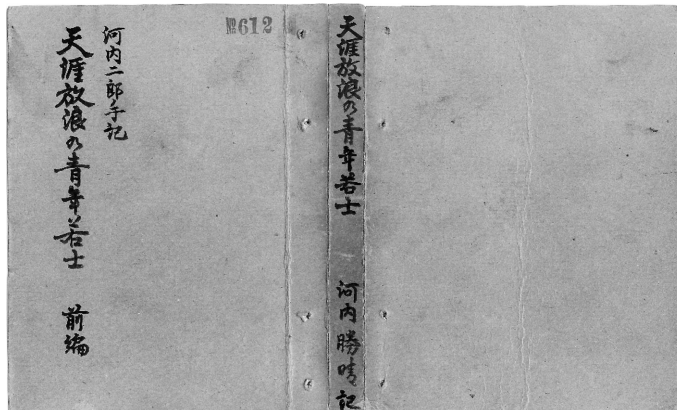
### 3. 自 叙 伝

「小島文献目録」は、昭和 6（1931）年、小島 17 歳の業績・原稿から開始されるが、これから述べる「自叙伝」は昭和 7 年（1935）年 3 月に書かれたものと思われるが、先の目録には記載されていない。「自分のために書いた」作品という小島の判断であろうか。

「天涯放浪の青年若士」前編、中編の 2 冊

河内二郎 手記 昭和 7 年 3 月（1932 年）

横 20 行、縦 20 字（1 頁 400 字）の原稿用紙に書かれている。それを綴じ、ハンコで頁数がうたれている。総頁数は 160 頁、6 万 4 千字になる。



前篇の構成は、序と 10 章で構成されている。序では小島のおいたちを「楠峰自叙伝」として、河内堅吉先生に捧げるとしている<sup>(8)</sup>。記述の内容は、先祖の系譜や家業のこと、そして

小学校のできごとである。父母を河内亀二郎、およね(小島亀藏、米)と語り、家運衰退のことが詳しい。中編は、二、三巻で構成され、二巻で大阪府立横山師範学校(天王寺師範学校)予科、三巻で同校本科でのことを記述する。予科への入学は昭和2年、本科へは昭和4年に入学とし、実際の履歴と一致するが、果たして小島の半生記を自分史として整理したものか、あるいは、心象自由にフィクションを取り込みながらの「小説」なのか、その判断は今の段階ではどちらとも言えない。彼は、「備忘録」と表している。

自叙伝を記す理由を「序」では次ように述べている。

「予は未だ19歳、将来大いに活躍して自伝を賑わすかも知れぬが、今のところ、平凡に始まって平凡を連続している。ここに記したるものも自伝と言へば余りに少量だ、人生70までとしてその4分の1、序曲に過ぎない。むしろこれは予の備忘録であり、忘れぬための記録である。

平凡の過去を平凡の筆で記述したりとて、何らの楽味もあるまい。固より一種の閑文字。しかし、読んで毒にならぬだけは保証する。とにかくに予の誕生より今日に至るまでを秩序立てて記述した。

世の逆境を行く者の記述はそれだけに面白い。予のごときはむしろ平凡すぎる位だ。予定の行動をなし来たのである。予の大望のごときものもあったとて、成し上じべき材ではない。

予は日記はつけない。およそ年来少しばかり暇にあかして俳句等をつけたが、もとよりこれに何の資料にもならぬ。よって本篇は全く念頭に浮かぶままだ。」

昭和壬申歳三月一日 午前6時半

楠峰 学人

## 名前の所以

「次いで大正三年には玉作に居を移しました。これは城東線に面して汽車の煤煙とその響きと喧騒で衛生に悪い所でした。

その年に、第二男の勝勝が生まれました。勝勝が生まれるといよいよこの騒がしい家にいたまらずよねは大いに急いでその近くに新たに築造しかけました。勝勝が生まれますと、兄の辰治は「この子は、わしより立派にしてやりたい。わしに勝つ様な子になれ」とて勝治と名づけました。勝と訓で読めば治もハルと訓じねばなりません。治は晴に通じ、晴は胜に通じ、勝晴、勝勝ともいいました。」(32頁)

## 長男の死

「それから昭和になって長子の辰治が死し、亀二郎は望みをかけた嗣子をなくしてがっか

りました。代だいこの家は長子が早く死す血統です。辰治は法学士としてこれからという時に死にました。次男の勝治に天涯放浪の性格、これは亀二郎の性格そっくりでした。辰治がいればともかくも、もう一度立派に河内家を建て直したろうが、死んでしまへばそれまでのもの。

勝治は少時より父の亀二郎と同様に書業に親しんで将来この家を継ぐべき質ではありません。二男は冷飯草履とか言って昔から余り好い者ではありませんが、その代わりに気楽でした。それなのに今、辰治が死んで、河内復興の大任が勝治の双肩にふりかかってきました。愚才勝治はどんなにしてこの大任をやったのけるか、それはまだ行く末のこと、勝治は今年19才の青年です。それなのに爺臭い男です。」（34頁）

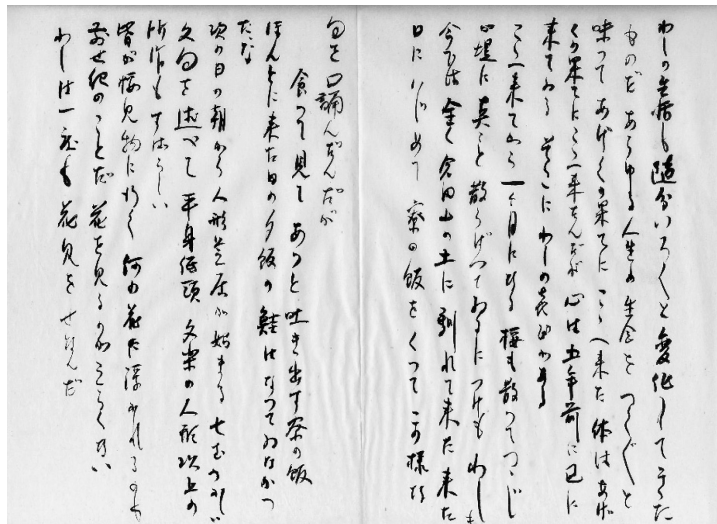
#### 14歳での自覚

「僕ということがわずかながらも凡庸の頭に浮かんで努力しよう、えらくなろうと考えたのは、どうしても14歳の時だったろう。天下の放浪人小島勝治は刺激されることなく、14歳までを送ってしまって温かい家庭に育って近親の愛を受けて何にも思わず大きくなった。それだから、14歳までは何のこともなかった。14歳に堅吉から宣言されて急に任が重くなった。

で、それまでのことは話せと言われても、途切れ途切れの漫談のようになら話せるかも知れぬが天下の放浪人小島勝治、凡能の頭であれば、系統立てて話すことは到底困難だ。古の君子は4才で志を立て、6才で経国の法を究めたとか、大雅堂は5歳で擘字を作ったのに、千呆禅師はこれを麒麟児なりと言っているし、楠正成は双葉より芳しと言っている。吾ら凡才はずかしながらさような人とは種類が違うらしい。それで、14歳まで平凡に過ごしてしまった。14歳と言えば、むかしなら一人前のおとなだ。15才で元服して前髪を落としてた齡、初陣の功名を立てて弓矢を持って戦場を馳せ廻り敵の二、三人も突いた齡、それは昔の英雄豪傑のおんこと、僕は単なる平民の児として、ひとりの芸術家の子として、普通に成長し、尋常に大きくなり、何の刺戟もなく過ごして来たので特筆大書する材料は無い。僕にとっては幸か不幸か知らぬけれども決して不幸とは思っていない。天性の楽天家祖先の血を受けたというのか。父の楠海も、祖父の龍雲も晩年にはこのとおりの楽天家だった。」（36頁）

小島の「年譜」は、『統計文化論集』の末尾に記載されているが、学校時代の記述は少ない。年譜では、昭和6（1931）年4月 浪速中学入学とある。これだと17歳で旧制中学に入学となる。1927年の「日記」では、大正10（1921）年4月に東雲小学校入学、昭和2（1927）年の3月に同小学校卒業、4月11日に大阪府天王寺師範入学と記している。また、「小島文献目録」に、昭和6年の項目に、「三月、書道を断念して浪花中学に入学」とあるから、天王寺師範は4年間在籍、何らかの理由で浪花中学に編入学したものと考えるのが妥当であろう。

師範学校の寮生活について、『楽天洞漫録』に記載がある。



河内二郎の名で日記や随筆集『楽天洞漫録』 昭和8(1933)年  
「食つて見て、あつと驚く 寮の飯」

### 家の没落事情

「日露戦争で祖父の長文は大儲けをしたとのこと、戦争終わってポーツマス条約が結ばれて、「小村は国賊也」と世間がやかましく騒ぎ立てて、それから日本は一躍世界の日本として認められ、国威は揚がって戦争気分のどか景気。

この時に祖父は死んだ。もちろん僕は生まれる前のこと。祖父の生前から手を伸ばしていた叔父の三郎は祖父の死と聞くや父のお人よしをうまくおだてて、全財産を分捕った。母が

地団太踏んで憤慨したとて後の祭り、叔父は高見で見物している有様で、そのうえ父は「ほっておけ主義」である。「ほっとけ」は捨てて置けに通ず。仏のごとき円満の人格の持ち主という意味だ。遂に天王寺に移って店を閉じ、玉作に來た。使用人はすべて散ったが、堅吉と永徳とおよしだけが残った。

そうこうして中に、僕が生まれて成長した。叔父は済ましたもの、どこを風が吹くかと収まり込んで僕が遊びに行っても茶の一杯も出さぬ。以前の親戚も今は権力を一手に握った叔父にさからってまでも父と交際する者はなかった。又、父と交際しても何の利もないことを熟知していた。長い物には巻かれよで当座の権力のある人に頼って行けば間違いのないのが現在不変の真理。

昔は堂々と河内屋を一手に引受て支配した河内亀二郎も今は、玉作に家を賃した詫び住い、昨日は揚々と若旦那風をなびかせた河内楠海も今日は苦勞にやつれた哀れの面影、さすが呑氣の父も少々悶着した。

西に分家した堅吉は西河内屋と名乗って鍛冶業を継いでやっていった。そして一週一度は必ず僕を尋ねては大根や鮭を一切れ持って來たり、西郷隆盛の絵葉書を持ってきてくれた。尤も高価な物はなかったにしろ、この一葉の大根と一片の鮭が貧者の一灯として堅吉の真心としてどれだけ僕らにうれしかったことか。富める者が、のし水引を抑山らしく戴いた贈り物をよこしたとて、それが真心からでなかったら何のうれしいことがあろう。母は、感謝して泣いた。僕も大へんうれしくて堅吉が一番すきだった。それで彼が望みのままに、いろはにはへとを大きく半紙に書いたのと、鉛筆で東郷元師の肖像を描いたのを与えた。彼は大へん喜んで後に「いろは」は、額にしてあった。そして彼は常に言った。

奥様、お天道様は照っていらしゃるだ。運というものはわからないものですよ。丁度あの車の輪のようでさあ、上にある時は榮えるんで下へ來ると衰える。奴が今いくら榮えてたって、今にひっくり返るまさあ。人の財産を横取りしてよくまあお天道様の罰が当たらにことだ。今にごらんさい。私がこの坊ちゃまを立てて立派にやってみますよ。

そして無性に頭を撫で、

「坊ちゃま、しっかりやんなさいよ。今にえらくなって叔父さんを見下してやんなさい。あいつが金持っていてもね、学をさへやっときゃいいんだ。だから坊ちゃまは、しっかり勉強して学者になんないよ。」

先に残ったおよしはその後家族の一人として待遇した。親も兄弟もない一人身であるから、その方が都合よかった。

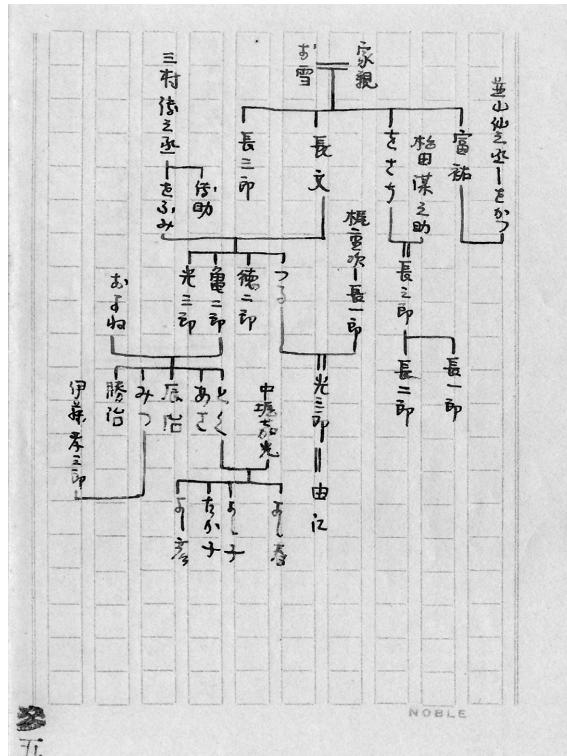
「坊ちゃま、しっかりやりなさい。今に天下一のえらい人になってあの叔父さんの鼻あかしてやりなさい。」

としきりに席立てるので、僕はどちらを向いても「しっかりせよ」の箱詰めになれて一向にしっかりする方法はわからなかった。まして、天下一の大学者になれるとも思わなかった



が、なれたらなくてもいいくらいには思っていた。唯、わかっていたのは叔父は悪くて、およしや堅吉は良い人だということだけ。深いことや情やそんなことは分かるはずはない。そして、しっかりしようと思いつつながら過ごしてしまった。」(49頁)

勝治の手による家系図では、勝治の兄妹は、亀二郎、およね夫婦に、長女とく、二女あさ、そして長男の辰治、三女みつ、最後が二男の勝治となる<sup>(9)</sup>。



### 兄のこと、小島の進学問題

「又、父は龍雲書道界を設立して書道報国を目指して米村楠梅の名で雑誌「龍雲」を発刊し、両3年は継続した。父の書体は手本としては余り良くなかったようだ。

二階の書屋うづくまって、書籍のいやな臭気を喜んでしきりに字を書く。浮世を離れた偏屈男丸出し。

僕が小学校へ入学したときに姉は女学校へ入った。翌年兄が市岡中学校（現 府立市岡高校）より第一高等学校（現 東京大学）へ入学した。姉は僕と最もよく気があった。兄弟中でも最も仲がよかった。姉は勝気であって、てきぱきしたお転婆だから、この点が最も僕は好きだ。これに反して兄のにやにやしたのは秀才か天才かは知らぬが、気に障る。僕は兄が

最も嫌いだった。兄は大正 11 年の 4 月東京へと発った。

「しっかり東京で勉強してね」

「ちょいちょい手紙を送ってよ」

「達者でおれよ」

「兄さんこそ弱いくせに病気になったって知らんよ」

こんな風に分かれたが、実はけむたい兄の門出を喜んだ。東京へ行けばもう 6 年は帰って来ぬ。落第すれば 7 年になるが、秀才君落第はせぬとしても 6 年は大丈夫。兄は出しなに母にこんなことを言った。

「今度帰る時には立派になってきます。学費なんて心配はいりませんよ。たかが月に 30 円や 40 円、どこかへ家庭教師にでも行ってやっていきます。だからこっちのことは心配なく妹や弟をよくみて下さい、美津子かれこれからだんだん生意気になりますからね。」

ご自分のことを見て言いなさいと言わぬばかりに姉は憤慨した。生意気になるなんていらざるお世話さ。後のことだが僕が 3 年の頃兄から電報が来た。

「ビョウキ五〇エンオクレ」

母は早速東京の松山に頼んで、ひそかに調べたところ、カフェーへ収まる金とばれた事は、秀才の苦学生の内容、推して知るべし。家庭教師をやっているか知らぬが月 40 円、50 円と送ってまだ不足とは困った兄貴。

「そうなさい。そうなさい。これからの世の中はそれに限りますよ。中学をでたかつて何になるでなし、せんど苦勞して又就職難やなんて一苦勞するし、兄さんがもうすぐ大学でなさるし、坊ちゃんの方は、別の方に進む方がよろしいやろうし、だんだん世の中がせちがらくなってきて仕事迷いしたりなんやかやと迷うより一番固うてよろしいやろ」

堅吉は、朝から来てしきりに母に説いていた。彼は母のもっとも良い相談相手であって、今までから何かにつけて相談していた。

「それに坊ちゃんかて、根があんまり商売やそんな方に向いたたちやないし、この方が一番適當していると思いますな。まあ、一変は旦那にも相談してそう定めといたらよろしいやろ」

僕のことについて彼は十分の世話をするつもりだったらしい。僕は 13 になってもう小学校を卒業する歳となった。他の学校に進まねばならぬ。これに就いては母と堅吉とがかなり

以前より相談して話して定めてあったらしい。兄は中学校より大学と正系の学校を経てきたし。姉は、女として普通の教育を受けたので、さて、僕は相談の結果師範学校が好いということになった。第一に僕の性格がこれに適していると言うんだ。僕の面が小学校の鼻たれ小僧を取り扱うに適當しているという人が、まあ母が見るんだから止むを得ぬとして、第二は、父もだんだん年を取って来て大学なんかへ入るのを待ってられんという。もちろん、父の立場としては仕方なしとしても兄が弟と10歳の差、しからば世間一般なら兄が弟を教育してしかるべきなのに不肖かへこたれ兄貴は徒に人生青春を東京の下宿六畳に塵埃にまみれている意気地なしだから仕方がない。第三には、学校を出てからの職業が固くて好い。これは堅吉の発意だったので僕は固いの意味を尋ねたが、彼のいわく、学校を出てから失職しないと、僕は又先生と言う商売が生真面目な商売だということを固いと言うたのかと思っていた。それで失業防止策として師範に入るのだと聞いては穏便じゃない。「堅吉お前は中等学校を職業教授所と思い、師範学校を失業避難所と考えるのか。僕は職業くらいなら売書でも売文でもやるから大丈夫だ。それよりもっと上のことを考えてるのだ」と堅吉先生いよいよ僕をほめたてて言うに、

「それでこそ坊ちゃんだ。さすが井上大九郎の血を受けているだけある。えらい、わしなんど傍へもよれない」

僕は、何だかわけがわからぬ。とにかく師範学校とかに入学することに定めた。

そうこうしている時に、叔父から手紙がきた。是はめずらしいことで叔父との間は久しく以前より交際文通をしていなかったもので、この手紙は好奇の眼で見られた。

大阪市東区玉堀町 540

小島亀二郎 様 親展

親展とは仰山らしい文言。しかし、よくできた。

〈略〉

文言ははなはだ美麗だ、しかし、それは皮相の見、その実の叔父の心を一口につづめて言えば、「勝治、小学校を卒業したらば学校へやらずに商売人に丁稚にやれ」となる。それならそうと何もややこしい手紙をよこさずとも話しはわかる。堅吉はこれを読んでいよいよ怒った。

「だいたいあの叔父たあどんな面しているかなあ。くれぐれも失敬なことを言うよこす。ただでは済まさない。いくら落ちぶれたと言っても豊臣太閤の忠臣のそのまた忠臣の子孫だ。金がなくとも丁稚にせよとは何事だ。そんなことをした日にやわしは大旦那（長文）に済まねい。あの餓鬼やあ、人を馬鹿にするも程がある。何も奴に学校へ入れるから金をよこせというものでなし。こっちの金でこつての坊ちゃまを学校に入れるのに何の干渉することがあるものか。今までに一度だって手紙をよこしたことのないものを今になって何を言ってるんだ。」

火のようになったので、僕までが怖かった。

「今度、あの阿呆面さげてのこのこ来た時にや堅吉様、直々の談判さあ。あいつあ学が無いものだから、こっちの坊ちゃまを学校に入れると煙たいんだ。」

母は、さすがに内心は怒っても外は穏和だった。

「叔父も別に悪気があったんじゃないから、こっちが勝手にやって、別に気に止めん方がいい。」となだめて断然定めた。

その後も叔父は種々の手段んをもって邪魔をしたが遂に僕の運命は定まった。小学六ヶ年の僕の生活は僕の純真の性格を築きあげた。喜ばしい社会と、楽しい人生の部分のみ見てきた僕には、金の力と富の権力と、しかも金の力ですべてを圧迫せんとする叔父の心情を諒解できなかった。叔父は何ゆえに僕を丁稚にやれなんて言ってよこすのか。ともかくも僕はもう一度我が家を起こしたい。堅吉に聞いた我が家のあの盛時に引き戻したい。それにはあるいは丁稚にいつてこつこつとやるがいいかも知れぬ。しかしそれは僕の性格を知らぬ者の話し、堅吉は常に言った。

「坊ちゃま、えらくなんなさい。」

この昔の言葉は、僕の頭深くしみ込んでいる。そうだ、えらくなろう。何でもいい。とにかくえらくなろう。師範学校でもよい、えらくするには差し支えないはずだから。

ただ無暗に聞いたこの語は今は僕の最大の標語となった。

かくして天涯放浪の青年若士小島勝治は生まれてはじめて志を立てた。これが 14 才のこと。

## ま と め

本稿の目的は、小島勝治という民間の統計学者が、時代や運命に翻弄されながら、ひたすら学問、研究への強い情熱を燃やし続け、巨大な業績を遺した背景を探ろうというものであった。その方法は、小島の手書き原稿や少年時の日記を材料にした。

社会学徒として、幾人かの生活史をヒヤリングしたものとして、ひとりの人間の生き方や人生航路は、一般に想像されるよりも早期に決定していると考えている。ここに登場する小島の場合も、彼自身がしきりに問う年代は、14 歳であった。中学への進学か、師範学校への道か、そこに人生の岐路があったと自覚したのが、「天涯放浪の青年若士」のテーマではなかったのか、師範学校を中退し、浪花中学に編入学、同校を卒業して、神宮皇学館、神職としての就職、さらに布施市役所勤務（統計業務）、財団法人弘済会勤務、という履歴の重みを知る。

本稿で紹介した資料は、最初に触れたように故上田千秋先生が保管されていたものの一部である。どのような経路で筆者の保管するところとなったのかは定かでない。経路よりも、重要なのは、貴重な原資料をどのように整理すべきかであろう。それが上田先生への学恩に報いる

ことと知る。

なお、本稿を執筆するにあたり、京都大学経済学部の櫻田忠衛先生に有益なコメントをいただいた。感謝申し上げたい。

〔注〕

- (1) 佛教大学社会学部論集 第 3 号 1969 年発行。
- (2) 同書 29 頁。
- (3) 筆者が保管している民俗学関連の原稿は、以下に記す。これらの一部はすでに公刊されている。

「民俗学論文集 第 2 号」

目次

亀と酒

まりを作る話

入口の便所

傍示村の神と手伝

六月一日の行事

宗教と国史

堺の民間神と信仰

頭家の話

河内の職人調査

懐かしい言葉

統計調査について

頭家と職人と

まぶいこめ

酒を飲む話

阿倍野ヶ原の夕闇

数字無駄話

両墓制資料

てのこぼ・ころみ

農村年中行事

しもべと職人

統計と世相の学 (以上 23 稿)

「民俗学論文集 第 3 号」

目次

農村年中行事 その二

家名漫話

大阪の火方道具

平常食の問題

綿作の話

宮座の崩壊事情

職人の町と農業

荒川浅丸がこと

燈明講

七つかまど

河内のふだんぎ（以上 12 稿）

- (4) 前掲書, 12 頁。
- (5) 謄写版印刷になる「土と史」は、表紙に「土史の会発行」とあり、その奥付に趣味随筆雑誌、限定 30 部発行とある。小島文献目録に、昭和 10 年、「土と史」を発刊、謄写版刷の小冊であったがうれしかった。十日戎の日に謄写版を買ってかへったのである。丁度わたしの一ヶ月の給料でまだたりなかった。前掲書 16 頁。
- (6) 『統計文化論集Ⅳ』1985 年、序にかえて－編者まえがき－。
- (7) 同書 v 頁、昭和 15 年 12 月 19 日の日記。
- 小島の日記は、「楽久我記」（小島、22 歳～27 歳 昭和 10～15 年）として残されている。小島の初期の日記は、小学生高学年のものであろうが。著書が保管するものでは、昭和 2（1927）年のライオン当用日記帳が古い。小島 13 歳、入学試験のことを次のように書いている。
- 「4 月 11 日（月）発表日来る 見に行った 一番に合格 喜ばし 平常（ヘイゼ）の努力 表れける。」
- また、その日には、次いで
- 「朝早くおきたが母に止められて又ねた 七時ごろから学校に行った。一番に書いてある。夢かと思った位だ、明日の時間割もうつつしかえりかけたら、中村君が母さんと共に来た。『通りましたか』心の中では『通る位当たりまえだい』と思った。『はい 書いてました』と云った。」幼年の小島の性格が出ている。
- (8) 「楠峰自叙伝 2 巻謹んで故河内堅吉先生の霊前に献ず」とある。
- 元来予は堅吉の美はしい心を伝えんとして書き始めた。感激の裡に一篇を草しおわって、数日を費やしたのみであった。しこうして余分のことを書く余裕も筆もなく、又書くべきことは落とさなかったものである。（自叙伝 序より）
- 堅吉というのは、小島勝治の祖父が始めた鍛冶屋の徒弟の一人である。小島の父の代になって家運が傾き、一家は貧する。それを支えた忠義な奉公人が堅吉である。
- (9) 家系図は、小島の父は亀二郎、母はおよね、1927 年の日記には、亀蔵、米、亀蔵は、明治 7 年 3 月 22 日生まれ、母の米は、明治 9 年 7 月 31 日生まれ、姉の光子、明治 42 年 3 月 3 日生まれとなっている。
- (10) 昭和 2（1927）年の当用日記（個人の記録）
- 名前 小島勝治  
生年月 大正 3 年 10 月 19 日  
原籍 大阪市東区玉堀町 540  
現住所 大阪市東区玉堀町 540  
履歴 大正 10 年 4 月 1 日 東雲校入学  
昭和 2 年 3 月 20 日 東雲校卒業  
昭和 2 年 4 月 12 日 大阪府天王寺師範学校付属小学校 入学

#### 〔付記〕

本稿は、平成 20 年度佛教大学特別研究費による研究成果である。記して感謝もうしあげる。

（たかはし しんいち 公共政策学科）

2010 年 10 月 12 日受理